

オーストラリアの柑橘類事情(オレンジ、ソフト柑橘類)

米国農務省GAINレポート 2023年12月19日

これは米国農務省海外農業局のキャンベラ事務所(オーストラリア)が作成した「柑橘類年次報告書」の一部を訳したものであり、米国政府の公式見解及びデータとは異なる場合があります。

要旨

2023/24年度(2024年4月開始)産柑橘類の出荷シーズンに向けた状況は良好であり、生産者は肥料と農薬のコスト高が軽減され、労働力の制約がさらに緩和されることの恩恵を期待している。オレンジの生産量は、前年度の推計値から5%増となる53万トンと予想されており、これは過去20年で2番目に多い数値となっている。タンジェリン/マンダリンの生産量は史上3番目に多い18万トンと予測される。2023/24年度のオレンジの輸出量は13%増の18万トン、タンジェリン/マンダリンの輸出量は8万5千トンと予測される。オレンジ果汁の生産量は、主に生鮮オレンジ(ネーブル種)の品質向上が見込まれることから4%減の1万5,400トンと予測され、輸入量は1万4千トンの横ばいと予測される。

要約

オーストラリアの2023/24販売年度(以下「年度」)のオレンジ生産量は、2022/23年度の推定50万5千トンから53万トンに増加すると予測される。これが実現すれば、この20年で2番目に多い結果となる。この増加は、季節的な条件が通常に回復するという期待と隔年結果に大きく関係している。柑橘類生産者は、早期の生産条件が良好なことに加えて、当該年度の投入コストの軽減と労働力の制約の緩和によって恩恵を受けると期待している。特に、肥料と農薬のコストは、ここ数か月で過去の通常の水準近くまで大幅に低下しており、予測対象年度(2023/24年度)に入っても続く予想される。コロナ禍による労働力不足は、2022/23年度の推定において大幅に改善されており、これは予測対象年度にさらに改善すると予想される。また、主要な灌漑用貯水池はほぼ満水であり、生産者は2023/24年度産に十分な水が利用できることを確信している。

オレンジの輸出量は、主に生産量の増加により18万トンに増加すると予測されており、2022/23年度の推定輸出量16万トンよりもかなり多い。この輸出予測が達成されれば、史上5番目の規模となる。国内消費量も、2022/23年度の推定値14万5千トンから、予測対象年度には16万トンに増加すると予測される。一方、加工用に仕向けられるオレンジの量は、予測対象年度の生鮮オレンジの品質の向上(生食用が増えて加工用が減る)が予想されるため、5%減の20万トンと予測される。

オーストラリアのマンダリンの栽培面積は、ネーブルオレンジ(生食用)よりも高い割合で拡大を続けているが、産地の多様性もオレンジより大きい。マンダリンの栽培面積は2014年以降50%増加しており、特に種なし品種に重点が置かれている。その多くは今後数年で結果を開始し、生産量と輸出量の伸びを記録的な水準に押し上げると見られる。2023/24年度のマンダリン生産量は18万トン、輸出量は過去最高に近い8万5千トンと予測される。予測対象年度の国内消費量は、横ばいの9万4千トンと予想される。

オーストラリアのオレンジ果汁の予測生産量は、主に生鮮オレンジ(ネーブル種)の品質向上が見込まれ、加工用への予想仕向量が減少するため、4%減の1万5,400トンと予測される。オレンジ果汁の輸入量は、2022/23年度の推定値と同じ1万4千トンで横ばいと予測される。一方、輸出量は2022/23年度の5千トンから4千トンに減少すると予測される。オレンジ果汁の国内消費量は、近年の水準とほぼ同じ2万5,500トンに留まると予測される。

<生鮮オレンジ>

背景

オーストラリアの主要オレンジ産地は、灌漑水を確保しやすい南部の温帯気候地域に位置する(下図参照)。これらの産地は、以下の名称で知られている。

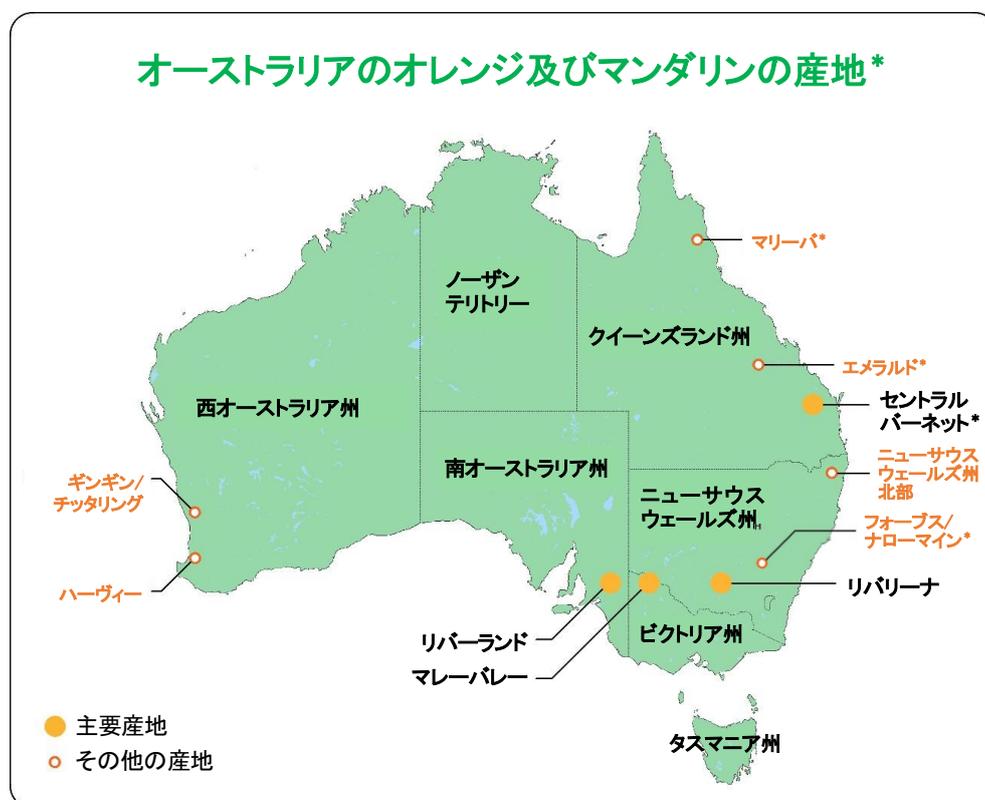
リバーリーナ地域 - ニューサウスウェールズ州南部のグリフィス市及びリートン町の周辺

マレーバレー地域 - ビクトリア州北西部のマレー川沿いの主にミルドゥーラ市とスワンヒル市の間

リバーランド地域 - 南オーストラリア州南東部*のマレー川沿い(原文では誤って北西部と記載)

これらの地域の特徴は、土壌が水はけのよい砂壤土で、温帯気候であり、年間降水量が約300mmと少なく、そのほとんどが収穫期と次期作の生育初期に当たる5月から10月の間に降ることである。冬は穏やかだが、果樹が必要とする十分な低温期間がある。これらの地域では、果樹の水分要求量の大部分を灌漑に依存している。こうした条件は、発芽を促進して潜在的な収量を高め、春から秋までの降水量の少なさと暖かい気温は降霜、湿気、降雹のリスクを最小限に抑え、よく管理された点滴灌漑と計画的な施肥により果実の生育が最適化されている。

これら3大産地のオレンジ栽培面積は、1万6,131ヘクタールで、全国の90%を占めている。全国の合計では、ネーブルオレンジが1万1,530ヘクタール、バレンシアオレンジが6,310ヘクタールである(出典: オーストラリア柑橘類協会 - オーストラリア柑橘類センサス2022)。リバーナ地域は突出して最大のオレンジ産地であり、総栽培面積の約53%がバレンシアオレンジで、国内の果汁用オレンジ栽培面積の66%を占めている。ニューサウスウェールズ州北部、クイーンズランド州及び西オーストラリア州にも小規模な産地がある。



出典: オーストラリア柑橘類協会/オーストラリア統計局センサス/農務省海外農業局キャンベラ事務所

* 訳注: この図は原文中のオレンジの産地図とマンダリンの産地図を訳者が合成したものです。オレンジの産地図ではセントラルバーネットは「その他の産地」とされており、マリーバ及びエメラルドは記載がありません。マンダリンの産地図ではフォーブス/ナローメインは記載がありません。

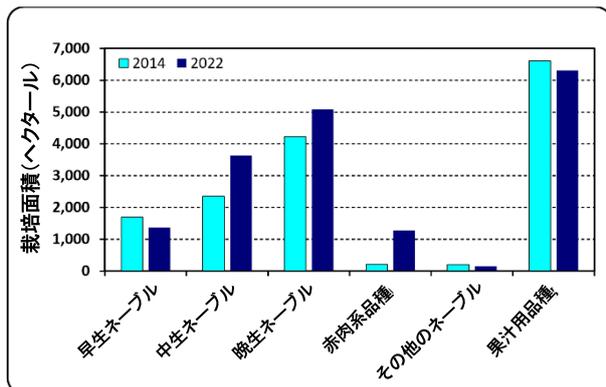
3大産地の収穫期は、ネーブルオレンジが通常5月から10月であり、バレンシアオレンジが通常11月から2月である。最高品質のバレンシアオレンジの一部は、(果汁用としてではなく)生鮮市場で販売され、国内産生鮮オレンジを消費者に提供できる期間を引き延ばしている。

オーストラリア柑橘類協会は、2014年から毎年、果樹のセンサス調査を行っている。2014年から2022年までの調査結果は、オーストラリアの主要産地において、ネーブルオレンジと赤肉系品種の栽培面積がこの8年間で大幅に増加したことを示している。ただし、果樹が成木化し全体的な生産量への影響が表れるまでにはまだしばらく時間がかかる。

果汁用でないオレンジ品種の約90%はネーブル種であり、この報告書では果汁用でないオレンジをすべてネーブルオレンジとしている。また、果汁用品種の大半(85%)はバレンシア種の各品種であり、この報告書ではすべての果汁用品種をバレンシアオレンジとしている。

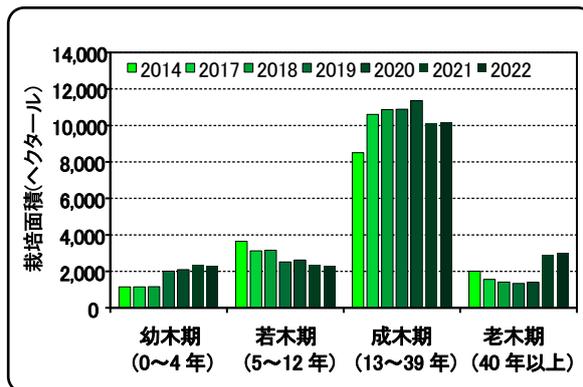
ネーブルオレンジとバレンシアオレンジを合わせた総栽培面積は、2014年の1万5,307ヘクタールから2022年には1万7,839ヘクタールへと17%増加した。この間、バレンシアオレンジの面積は5%減少し、ネーブルオレンジの面積は33%増加した。ネーブルオレンジの栽培面積の増加のうち、中生品種及び赤肉系品種はそれぞれ1,286ヘクタール(55%)及び1,065ヘクタール(500%)と最大の増加を示した(図2参照)。

図2 オレンジ栽培面積の比較 2014年/2021年



出典: オーストラリア柑橘類協会/ Horticulture Innovation Australia

図3 樹齢別栽培面積の推移 2014年~2021年



出典: オーストラリア柑橘類協会/ Horticulture Innovation Australia

全体としての長期的な傾向は園地の拡大による生産量の増加であるが、いくつかの理由により多少の遅れが生じる可能性がある。

- 1) 近年、幼木(植栽後0~4年の未結果樹)の面積が増加しているが、
- 2) 老木(40年以上)に移行する果樹が2021年から2022の間に増加し、
- 3) 生産の最盛期にある成木(13~39年)の面積が、2020年から2022年の間に減少した

短期的・中期的には、新しく植栽した果樹が成木化して生産の最盛期に達するまでは、潜在的な生産量は横ばいで推移すると見られる。

生産

当事務所は、2023/24年度(2024年4月~2025年3月)の生鮮オレンジ生産量を、2022/23年度の推定値50万5千トンから5%増となる53万トンと予測する。この増加は、主に季節的な条件が通常に回復するという期待に関連しているが、予測対象年度に予想される隔年結果による増収の影響も組み込んでいる。着果前と着果期には、通常どおりの比較的乾燥した天候であった。着果後は平年並みか平年を上回る降雨量があり、果実の良好な肥大を促した。これらの条件により、予測対象年度には良好な収量と品質が期待される。

前述したとおり、2020年から2022年の間にオレンジの樹齢分布に変化があり、成木(13~39年)の面積が大幅に減少し、老木(40年以上)の数が大幅に増加した。若木(5~12年)の数も減少した。しかし、全体として、結果する樹齢のオレンジの合計面積はわずかに増加している。ここで重要なことは、果汁用オレンジの面積は一定しており、結果樹齢のオレンジの面積のわずかな増加はすべて生鮮市場向けのネーブルオレンジであったことである。2023年は結果樹齢のオレンジの増加がほとんどないため、2023/24年度に予想される生産量への影響は少ない。ただし、業界筋によるとオレンジの収穫量には隔年結果が見られ、2023/24年度は表年であると予想されている。この分析は、2023/24年度の53万トンの予測生産量に最も大きな影響を与えた。

早期の生産条件が良好なことに加えて、投入コストの変化はオレンジ生産者の意思決定プロセスに影響を与え、予測対象年の生産量と品質に関わってくる。投入コストの削減、収穫労働力の制約のさらなる緩和、灌

概用水の十分な利用可能性の継続が期待されている。このような状況により、2023/24年度は生産者がオレンジの作柄を最適化し、価値の高い販売量が増えることが予想される。

輸出

当事務所は、2023/24年度の生鮮オレンジの輸出量を18万トンと予測しており、2022/23年度の下方修正された推計値16万トンを2万トン上回る。これは、やや以前となる2016/17年度から2019/20年度の間に達成された18万1千トン～19万8千トンの範囲への回帰であり、達成されれば史上5番目に高い記録となる。生産量の増加と全般的に通常どおりの品質への期待は、2023/24年度の輸出予測を押し上げている。

輸出は生産量と品質に大きく影響される。全体的な品質が高い季節には、輸出市場に適した生鮮オレンジの割合が高くなり、また搾汁に向けられる規格外品の量は減少する。

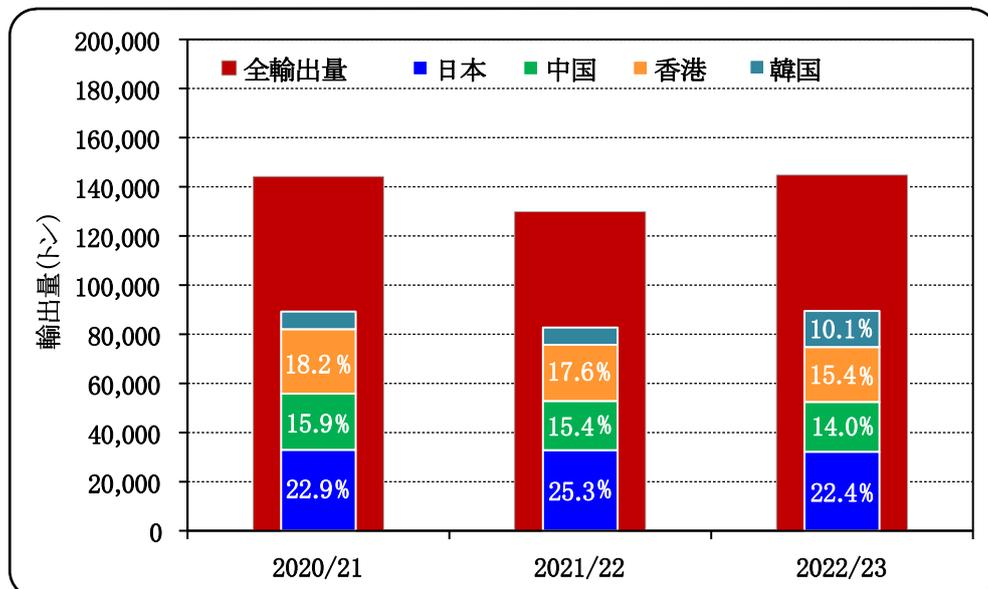
オーストラリアのオレンジ輸出は季節性が高く、オーストラリア北部の小規模産地からの少量の輸出が5月に始まり、その後3大産地の収穫が開始される6月には大量の輸出が始まる。7月から9月までが最盛期で、その後12月にかけて輸出が減少する。この季節性の高い出荷により、オレンジの生産が少ない近隣のアジア諸国及び季節が逆になる北半球諸国にネーブルオレンジを輸出する機会を獲得している。

近年のオーストラリア産オレンジの主な輸出先は、日本、中国、香港である。また、2022/23年度には韓国が重要な輸出先となった。これら4か国は、通常、輸出全体の約60%を占めている(図9参照)。オーストラリアは35か国以上に生鮮オレンジを輸出しており、主要輸出先のほとんどがアジアである。

近年、日本が最大の輸出先であり、通常、毎年約3万5千トンの比較的安定した量を輸出している。一方、中国と香港への輸出は年間2万～2万5千トン程度である。最も大きな変化は韓国で、2022/23年度の輸出量は過去2年間と比較して2倍以上に増加した。

2022/23年度の4月から10月までの期間(通常、通年の輸出量の約90%を占める)に観察された傾向は、同販売年度の残りの期間も維持される可能性が高い。

図9 主要オレンジ輸出先 2020/21～2022/23年の4月～10月



出典：オーストラリア統計局

オレンジの対中輸出量が徐々に減少しているのは、中国の国内生産量が継続的に増加していることを主要要因として輸入が減少傾向にある一環である。中国のオレンジの輸入には4つの主要な供給源があり、近年、輸入量全体の96～99%を占めている。特に注目すべきは、北半球のエジプトと米国からの輸入量が近年大

幅に減少していることである。一方、南半球の南アフリカとオーストラリアからの輸入量は、概ね横ばいかやや増加しており、輸入に占める割合が増加している。

2022/23年度の米国農務省の公式のオレンジ輸出予測は18万トンであったが、当事務所は16万トンに下方修正した。2022/23年度の4月から10月までの輸出量は14万5千トンで、通常、販売年度の残りの5か月間はペースが急激に落ち込む。過去5年間の平均では、残り5か月の輸出量は年間の9%であり、これは下方修正を支持している。

表1 オーストラリアの生鮮オレンジの生産需給統計

オレンジ(生鮮) 販売年度の始まり オーストラリア	2021/2022		2022/2023		2023/2024	
	2022年4月		2023年4月		2024年4月	
	農務省公式	今回推計値	農務省公式	今回推計値	農務省公式	今回推計値
栽培面積(ヘクタール)	17,700	17,700	17,800	17,800	0	17,900
収穫面積(ヘクタール)	15,300	15,300	15,400	15,400	0	15,500
結果樹本数(千本)	0	0	0	0	0	0
未結果樹本数(千本)	0	0	0	0	0	0
合計果樹本数(千本)	0	0	0	0	0	0
生産量(千トン)	535	535	505	505	0	530
輸入量(千トン)	10	10	15	10	0	10
総供給量(千トン)	545	545	520	515	0	540
輸出量(千トン)	145	144	180	160	0	180
生鮮国内消費量(千トン)	185	186	130	145	0	160
加工仕向量(千トン)	215	215	210	210	0	200
総仕向量(千トン)	545	545	520	515	0	540

<タンジェリン/マンダリン>

背景

オーストラリアのマンダリン及びタンジェリンの産地は、オレンジの3大産地よりもはるかに多様である。オーストラリアではタンジェリンも生産されているがその面積は非常に小さいため、タンジェリン/マンダリンの生産量のほぼ全量がマンダリン品種であり、アフォーラ、インペリアル、マーコット(及びこれらの派生品種)が栽培面積全体の79%を占めている(出典: オーストラリア柑橘類協会 柑橘類センサス2021)。

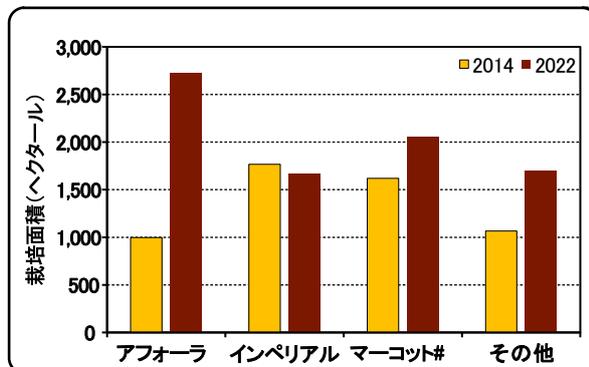
クイーンズランド州のマンダリン栽培面積は4,440ヘクタールと突出して多く、国内の栽培面積の54%を占めている。次に栽培面積が多い地域は1,430ヘクタール(18%)の南オーストラリア州リバーランド地域と1,419ヘクタール(17%)のビクトリア州マレーバレー地域である。クイーンズランド州最大のマンダリン産地は、同州南東部のガインダ町とムンドゥッペラ町の周辺のセントラルバーネット地域であるが、エメラルド地域(同州中部)とマリーバ地域(同州北部)でも生産されている。ニューサウスウェールズ州北部、ノーザンテリトリー、西オーストラリア州にも小規模なマンダリン産地がある。

果樹センサスのデータ収集が開始された2014年から2022年までの間に、マンダリンの栽培面積は5,451ヘクタールから8,157ヘクタールへと50%増加した。これは、成長率と拡大実面積において同じ期間のオレンジの増加を上回っている。また、この拡大はオーストラリアのすべての産地で広く起こっている。

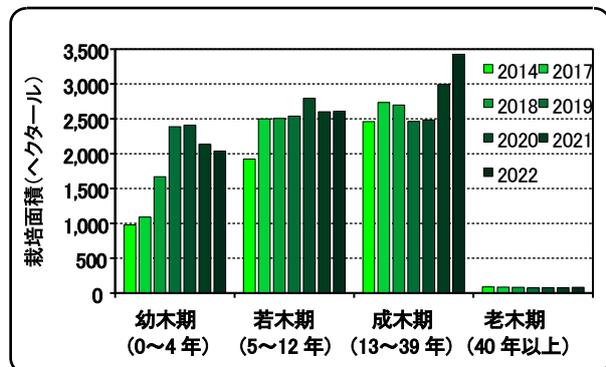
アフォーラ品種(アモレット及びタンゴを含む)は、2014年から2022年の期間に、その栽培面積が998ヘクタールから2,724ヘクタールへと最大の拡大を示し、現在ではまぎれもなく支配的な品種となっている(図16参照)。マーコット品種(種の少ないハニービー及びロイヤルハニーを含む)の面積も同じ期間に27%拡大した一方、古い品種であるインペリアル(ゴールドアップ及びアバナを含む)は6%減少した。「その他」にはタンジェロ等29種類が含まれ、その総栽培面積は60%(638ヘクタール)増加した。「その他」の品種の中で栽培

面積が最も増加したのは、デイジー、フェニックス、タンゴ(原文のまま)で、すべて比較的新しく、種子が無いかまたは少ない品種である。

図16 マンダリン栽培面積の比較 2014年/2022年 図17 樹齢別栽培面積の推移 2014~2022年



出典: オーストラリア柑橘類協会/ Horticulture Innovation Australia
種の少ない品種を含む



出典: オーストラリア柑橘類協会/ Horticulture Innovation Australia

2014年から2022年にかけての栽培面積の拡大は、未結果樹(0~4年生)の栽培面積が1,061ヘクタール以上(109%)増えて2,039ヘクタールに達したことに明白に表れている(図17参照)。しかし、過去2年間で新植の率は低下している。生産が始まる若木期(5~12年生)の果樹の栽培面積は過去6年間約2,600ヘクタールとほぼ横ばいで、総栽培面積のほぼ3分の1を占めている。同じ期間に成木(13~39年生)の面積は966ヘクタール(39%)増加し、過去2年間の増加が最も大きかった。2022年のマンダリンの樹齢分布のほぼ4分の1が未結果樹であり、老木(40年以上)の面積が非常に少ない。今後数年で現在の未結果樹が結果し始めるため、業界は生産量の急速な成長を期待できる。

生産

当事務所は、2022/23年度のタンジェリン/マンダリンの生産量を、2022/23年度の推定19万トンから5%減の18万トンと予測する。この減少は主に隔年結果によるもので、予測対象年は裏年である。タンジェリン/マンダリンの隔年結果は、オレンジほど顕著ではない。さらに、樹齢分布では若木の面積が増加し、全体的な生産量が増加しているため、隔年結果の影響はさらに隠されている。

オレンジの生産と同様に、マンダリンも予測対象年の灌漑水の十分な利用可能性と肥料と農薬のコスト削減を期待できる。前述のように、予測対象年には収穫労働力の不足がさらに緩和されると予想される。これらはすべて、2023/24年度の力強い生産に貢献し、達成されれば史上3番目に高い数字となる。

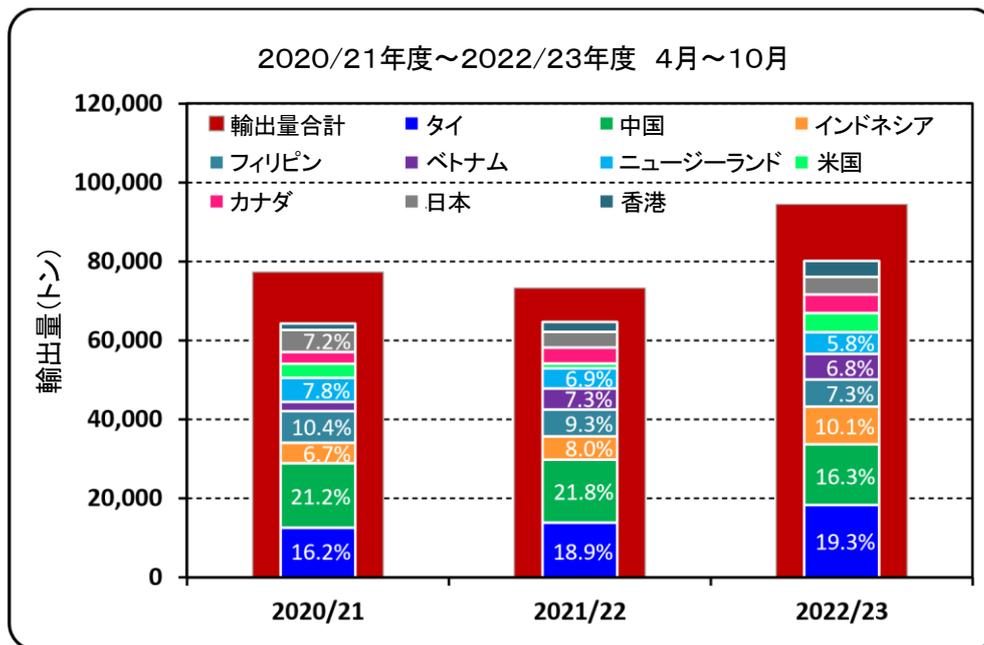
2022/23年度産マンダリン生産量の当事務所の予測は19万トンで、米国農務省の公式推定値と一致している。主要産地では全般的にマンダリンの生育条件は順調に推移しており、品質も概ね良好である。

輸出

当事務所は2023/24年度のマンダリン輸出量を、2022/23年度の推定9万5千トンに基づき、8万5千トンと予測する。これは、2023/24年度の生産量が1万トン減少すると予測されるためである。この予測が実現すれば、オーストラリアのマンダリン輸出量は史上3番目に多くなる。当事務所は近年の植栽の増加に基づき、果樹の成熟につれて生産量が増加を続け、輸出量が今後数年で記録的なピークに達すると予想する。

オーストラリアのマンダリン輸出先は約35か国と多様化しており、過去3年間では上位10か国が輸出総額の約85%を占めている(図表18参照)。タイは過去3年間でオーストラリア産マンダリンへの需要を高め、今では中国を抜いてオーストラリア最大の輸出先となり、輸出量全体の19%を占めている。インドネシア、フィリピン及びベトナムは、2022/23年度これまでに、それぞれ輸出量全体の7~10%を占めている。上位10か国のうちの低位5か国も、すべて輸出量全体の約5%を占める一定程度の輸出先である。

図18 タンジェリン/マンダリンの主要輸出先



出典: オーストラリア統計庁

当事務所は、2022/23年度のマンダリンの推定輸出量を、米国農務省の公式推定値9万トンから9万5千トンに上方修正する。2023年4月から10月までの輸出量は9万4,500トンで、この期間は平均して通年の輸出量全体のほぼ99%を占める。これまでの最高記録は2018/19年度の8万7千トンであり、今年度はオーストラリアにとって史上最高の輸出実績となる。

表3 オーストラリアの生鮮タンジェリン/マンダリンの生産需給統計

タンジェリン/マンダリン(生鮮)	2021/2022		2022/2023		2023/2024	
	2022年4月		2023年4月		2024年4月	
販売年度の始まり	農務省公式	今回推計値	農務省公式	今回推計値	農務省公式	今回推計値
オーストラリア						
栽培面積(ヘクタール)	7,800	7,800	7,900	7,900	0	8,000
収穫面積(ヘクタール)	5,700	5,700	5,800	5,800	0	5,900
結果樹本数(千本)	0	0	0	0	0	0
未結果樹本数(千本)	0	0	0	0	0	0
合計果樹本数(千本)	0	0	0	0	0	0
生産量(千トン)	175	175	190	190	0	180
輸入量(千トン)	3	2	4	2	0	2
総供給量(千トン)	178	177	194	192	0	182
輸出量(千トン)	75	74	90	95	0	85
生鮮国内消費量(千トン)	100	100	101	94	0	94
加工仕向量(千トン)	3	3	3	3	0	3
総仕向量(千トン)	178	177	194	192	0	182